

な実在などの存在も認めるのである。そして、こうしたヒックの考え方は、彼の宗教思想全般を通してよく表れている。

J・ヒックの自由意志論

——神経科学の挑戦に対する一応答——

保 呂 篤 彦

神経科学の成果が人文学の領域にも影響を与え始めている。宗教研究の分野も例外ではない。日本宗教学会においても、すでに神経科学の成果に基づく提言に対して批判的な応答が数年前から継続的に為されている。宗教多元主義の唱道者として名高い宗教哲学者・キリスト教神学者J・ヒックもまた、二〇〇六年の新著『宗教と科学の新しいフロンティア』において神経科学からの挑戦にこたえようとしているが、彼の応答は、人間の「自由意志」を擁護することに大きな力を注いでいる点で、特徴的であるように思われる。

ヒックが対決する神経科学に基づく自由意志否定論には心脳同一論と随伴現象論とがあるが、自然主義的な神経科学者や心の哲学者の議論の多くが近年では後者を取るため、彼の議論の中心も後者に向かう。後者は前者と異なり、心(意識)を非物理的現象と捉える点で二元論ではあるが、それが思考や行動を発動する力をもたず、ただ脳の活動を受動的に反映するだけであるとするため、自由意志否定論を帰結する。有名なりベットの実験は、ある行為に関係する運動準備電位がその行為を行お

うという意識的意志(決意)より以前に生じることを示したため、準備電位として現れる脳神経の作用が原因となつて意識的意志が生じたと解釈することが可能であり、そのため多くの研究者によって随伴現象論を支持するものと見なされてきた。しかし、ヒックはこの準備電位をその後を生じる意識的意志ではなく、おそらくはそれに先立って働いているであろう心の無意識の働きと関係づけることによって、随伴現象論を避け、むしろ本来の心脳二元論を擁護する方向で解釈する。

このように無意識の働きに着目するところから、その後のヒックの議論は、身体的行動を生じるような、その発生の時点の問題にしうる決意としての意志作用ではなく、むしろ科学や芸術においてみられる創造的な「知的自由」の作用の検討に向かい、その結果、「自己言及の問題」という論点に基づいて随伴現象論の自由意志否定論を論駁することになる。大胆に単純化すると、脳決定論者の議論は、脳決定論を生みだしてそれを主張するといふ彼自身の思考過程自体にも当てはめなければならぬということであり、そうすると、世界が決定されていることをいいたい「誰」が「知る」のか、また、そもそもそのような決定された世界で、特定の神経状態が「真」や「偽」という価値をもつと言えるのか、といったような困難な問題が生じるのであり、ヒックもまたこの点を突くのである。ヒックも述べているが、この種の議論は決して目新しいものではなく、多くの論者によって支持されている強力な議論である(ヒックは言及していないが、例えば、批判期直前のカントも類似の議論を展開している)。しかしながら、それでもなおこれに抵抗する

自然主義者がいることも確かであり、今後いかなる反論が構築されるか、継続して考察する必要がある。

ところで、ヒックが心脳同一論と随伴現象論とに反対して本来の意味での心脳二元論を採用すると言っているのであれば、それがデカルトの二元論に立ち返るものではないかという疑問や批判が当然生じる。ヒックもまたこのことを自覚していて、自らの立場が「非デカルト的」であると主張し、心脳の相互作用は「自然の諸法則」にしたがって生じると述べている。つまり、物質だけでなく心的・精神的なものを含む「自然」概念を提起するのである。しかし、その内容がより具体的に明らかにされない以上、新しい「自然」による解決も、「松果腺」のそれと何ら変わらないであろう。なぜなら、どちらも本来は物的であると想定されているものを、後から心的なものを担うように規定し直しているだけだからである。物と心の原初的な不可分性を踏まえずに構築された心脳二元論は、随伴現象論であれヒックの二元論であれ、「非デカルト的」であることなどできないのではなからうか。

日本における「宗教を精神医学からみる研究」の視点の諸相

大宮司 信

本論考は、これまでの日本における「『宗教を精神医学から見る研究』の視点」(以下「視点」)を、精神医学の方法と治療

という軸から瞥見し、宗教学からのありうべき批判をふまえ、筆者なりの今後の方向を展望するものである。

精神医学の方法論からの「視点」は一つの還元論であり、宗教一般を病理性に結びつけて解釈するとしてしばしば批判されてきた。一方方法論からでなく、精神医学と宗教に共通する癒し・治療の面から「視点」を据えていく方向がある。この場合、精神の病気の病理論・疾病論の基盤が治療論にあると考えるのが筆者の出発点である。

古代ギリシヤでは、生きること、生は一つの言葉ではなく、ゾーエーとピオスという二つの言葉によって表現されるとアガンベンを紹介している。本論考に引き寄せた筆者なりの踏み込んだ理解を、WHOの健康という概念、well being に関連させて考えると、ゾーエーとは「意味を見いださなくとも、とりあえず生きること」、すなわちわれわれが持っている生命の営みとしての生であり、being に関連すると考え、ピオスは「意味を見いだして生きる」という意味合いの生で、well being に関連すると考える。

精神医学は医学の一領域であり、well being で示される健康の保持・強化が目的であることはいままでもない。しかしピオス、すなわち筆者の表現する「意味を見いだして生きる」生よりも、「意味を見いださなくとも、とりあえず生きること」、すなわちゾーエーとしての生により志向し、また志向すべきであると考える。

またその方法も宗教に比べ、あえて強調すれば、よりゾーエー志向的と考える。すでに周知ではあるが、精神療法を例にと